

西鶴・近松から谷崎潤一郎・里見弴へ

——国語教育の観点からみる関西方言資料としての文学作品——

小 谷 博 泰

安 井 寿 枝

文部科学省の『中学校学習指導要領解説国語編』（平成20年9月東洋館出版社60ページ）では、次のような記載がある。

共通語を適切に使うことは、人々が相互の理解を進めるために不可欠な能力である。一方、方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的・社会的な伝統に裏付けられた言語である。その表現の豊かさと魅力など、方言が担っている役割を十分理解させ、方言を尊重する気持ちを持たせるようにしながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて使い分けられるように指導することが大切である。

ちなみに、文部省の『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説——国語編——』（平成11年9月東京書籍73ページ）には、さらに方言について「その表現の豊かさと魅力は、情報化社会であるがゆえに、一層価値を高くしているとも言える」との一文も書かれていた。

ところで、関西方言を「方言」とするならば、この方言には他の地方の方言にはない特殊性がある。これは言わずもがなのことではあるが、日本語の歴史では、江戸時代の半ばころまでは、関西の言語を日本語として扱う。ここでは、日本語とは、関西のことば、「関西日本語（関西語）」を指す。ところが、江戸時代の後半から突然、日本語とは「関東日本語（ないし江戸詞→東京語）」を指すことになり、それ以降の「日本語の歴史」とは、「関東日本語（関東語）の歴史」ということになる。同じ「日本語」ということばを使いながら、その内容が替わってしまうのである。「日本語史」の授業を担当していて、学界の常識というものに疑問を持つことがあるが、このすりかえなど、その最たるものである。さて、「関西日本語」というと、以後、上方詞、ついでに関西弁、関西方言（方言学では近畿方言）と呼ばれるようになる。（大阪人、あるいは京都の人にとっては、「大阪弁」、「京ことば」などの呼称はともかく、大阪方言、京都方言という語は、あるいは承知しがたいものではなからうか¹⁾。

さて、平安時代はその関西日本語、つまり当時の口語、のちに文語と呼ばれることとなった古典語の時代である。それが、中世、つまり鎌倉・室町時代に言語の様相が大きく変わり、話し言葉は近代の日本語、特に関西方言に近いものとなる。江戸時代の口頭言語はよほど現代関西語に近いものであっただろうことが、狂言、歌舞伎、人形浄瑠璃などの伝統芸能によって知られる。「関西方言（＝関西日本語）」の「表現の豊かさと魅力」とは、古典にあっては、つまりはその古典日本語（ほとんどが古典関西語）の魅力を言うことになる。それはまた、伝統芸能の言語表現の豊かさと魅力につながる。本論考では、第一章で、日本の文化の中心が大阪（大坂）・京都から江戸へ交替する直前の、近世前期における資料として、西鶴・近松の作品から、当時の関西語の様相をさぐり、また第二章で、現代に関東出身の小説家（谷崎潤一郎や里見弴）によって、関西日本語の豊かさと魅力が「発見」されているが、それによって生まれた文学作品における関西方言の諸相について分析と考察を試みたものである。

第一章 西鶴、近松の会話文における「関西日本語」

——関西方言の祖形として——

1. 井原西鶴『好色一代男』から

以下、作品資料には、小学館の新編古典文学全集『井原西鶴集』①を使う（仮名遣いなどこれによる。ただし、繰り返し符号は、現在の一般的な表記に直した）。調子高てうしだかにはうをばいを誘そし「朝夕あしたの汁じゆがうすい」の「はさみをくれるはずぢやが、たるるかしらぬ」と、ひとつとして聞くべき事にもあらず。39ページ（湯女）*（ ）内は話者。

「たる」は、「剃る、切れる」の意。会話部分を今の関西語で直訳すると「はさみをくれるはずやが、切れるかしらん」となるであろう。形容詞「うすい」は、文

語だと「うすし」か「うすき」になるところで坂梨隆三「近代の文法Ⅱ（上方篇）」に「イ音便は地の文の中や、年配の者、または階級的にはむしろ低いと思われる者の口から発せられることが多かったようである」²⁾とある。「くれる」は「くるる」となるはずのところである。一方、「たるる」は文語で、口語だと「たれる」となるはず。

「このあたりの事ではないか、^{いっそや}日外物がたりせし、歌よくうたうて酒飲んで、しかも憎からぬ女は。(略)」41ページ（世之介）*（ ）内は話者、以下同じ。

「ないか」「飲んで」は、文語文法だと「なきか」「飲みて」である。「うたうて」は、現在の関西方言と同じ連用形ウ音便。だが、「物がたりせし」の「し」は文語助動詞「き」の連体形。

以下、口語調の強い部分を抄出した。

「さてはその宮様に似たとはどころが似た」と戯るる。43ページ（世之介）

『夕は夜更けて起されたもしらず、状かきながら寝入った』。86ページ（蓮葉女）

「何をいうてもこれぢやもの、ただ寝ませう」と申す。92ページ（世之介）

「さあ、お寝やれ」と申す。92ページ（船宿の亭主）助動詞「たり」の口語「た」、^{たはぶ}「いひて」のウ音便「いうて」、^{たはぶ}「にてあり」からきた「ぢや」、口語助動詞同様の「ます」がある。「お～やる」は「お～ある」から来たものである³⁾。

「さてもさてもにくい女がある物かな。かまはずに寝てあたさうなる男の腹の上へ、もったいなや美しい足で踏みをつて、あまなこを糸のやうにしをつて、人もみる者ぢやに、大きなからだ、下なお人様が^{ひと}おもたかろに、いかに絵なればとて、この女房め」118ページ（奥女中、または^{はした}端女）

この「～をる」⁴⁾は、意味用法から考えても、大阪などで聞かれる現代関西語の「～しよる」、あるいは共通語でも作品におけるいわゆる役割語⁵⁾に使われる「～しおる」の同類。

現代語大阪弁の「～よる」については、中井精一「奈良県の方言」⁶⁾に

「ヨル」は、第三者の行為や存在に対して嫌悪感や迷惑感がある場合、あるいは対象を軽く卑しんで言うときなどに使用される下向きの待遇表現」である。（逆に、親近感や共感をこめて親しい人の動作に対して使用される場合もある。）

とあるのが適切な説明だ。ただし、大阪、奈良とは異

なり、神戸などでは、この「よる」はムード面より、アスペクト面での意味合いが強く、神戸方言の話者である本稿筆者の私は、少なくとも家庭では、自分や話し相手の行為についても、これを使うことがある。

『好色一代男』の会話中の敬語では、文語で古代語の「～侍り」中世語の「～候ふ」などもまじるが、文語関係の用例は省略する。

広うてきれいな宿をとりて、「なんと女郎衆、今ここではやるは誰ぢや」と問へば、「石山の観音様が時花ります」といふ。140ページ（宿屋の客引きの女→世之介）

「お伊勢さまへまゐります。かたさまは何としてここにござります」、^{いせ}「勘六が女郎狂ひの太鼓を持ちにきたが、あたまがいたい。うて」142ページ（十二、三の娘（禿）→世之介）

地の文に形容動詞連体形の「きれいな」や、関西弁式の形容詞ウ音便の「広うて」、「にて」からきた「で」がまじるかと思えば、動詞連用形は文語のまま「とりて」とある。助動詞「ます」は現代語と同様のものであろう。「ござります」は「ございます」の元の形。

「さあここが分別所、何としやるぞ」。「けふはかはつて玉川、伊藤、その外」と宮川町に早駕籠、目をふるうちにござりました。148ページ（世之介、遊び仲間）

「～やる」の歴史については、すでに山崎久之『続国語待遇表現体系の研究』⁷⁾ほか、詳しい研究がなされているので改めて言う余地はなさそうである。

ただ、素人考えとして述べさせてもらうなら、アルから来たこのヤルは、語源は別のものであるが、意味用法において現代関西語のハル敬語に近く感じられる。ヤルは敬意の度合いがそれより低いとも感じられるが、現代の「～はる」も丁寧語に近い用法があり、そうした意味段階ではきわめて近しいものと感じられるのである。なお、現代の大阪、奈良で女性の使う「～やる」があり、敬意の度合いではさらに近世の「～やる」に近いように感じられる⁸⁾が、こちらは主に第三者のことを言うときに使うものであって、会話の相手の行為にも対しても用いられる近世のものとは用法が異なっている⁹⁾。

「なんと世之介様、旅の悲しさをよく御合点あそばして、京の女郎さまの御気に入るやうにあそばせ」152ページ（太鼓持ち）

「何とて京にては太夫にはせなんだぞ」180ページ（世之介）

この「～なんだ」は、現代関西語の「～んかった」に

当たるが、現代でも高齢者では「なんだ」を使っている例があり、まだ関西方言としてこのことばは生きているといえる。

「やうす見るに、すこしたらぬ人を賭^{かけ}にして遣^{つか}はしけると、さながら見えますによつて、先さまの人、憎^{にく}さもにくし、あんな男にあうてとらしました」といふ。239ページ（太夫）

文語の「ける」と、関西語の「あうて（おーて）」が、並存している。

『好色一代男』の文体について、『日本語の歴史5』で中村幸彦氏は、「仮名草子に発生した口語的文章も、もちろん、しばしばでてくる。断本のごとく、ほとんど対話文のみでうずめた一章もある。談話調で一人の人の見聞談とした章もある」¹⁰⁾と述べている。

2. 近松門左衛門『生玉心中』『丹波与作待夜のこむろぶし』『心中天の網島』『五十年忌歌念仏』『冥途の飛脚』『曾根崎心中』

服部幸雄氏は「近松の世話浄瑠璃を資料として前期上方の町人社会における待遇表現を考察する学問は進んでおり、すでに先覚によってすぐれた業績が数多く公にされている。(中略)このように、研究の成果が着々と積み重ねられている現段階において、門外漢である私は、これに付け加えるべきものを何ひとつ持ちあわせていない」¹¹⁾と書いておられる。まして、近世語を全くの専門外の分野とする本稿筆者では、学界に言うべき言葉を持たないが、国語教育のために現代関西語について考える参考資料として近松作品を見るといふことで、わずかに違う角度からのぞいてみたいと考えるのである。ここにあげた諸資料からの引用例は、今回、すべて独自に調べた結果、見出したものではあるが、すでに諸先覚によって引かれたものと重なる例もあるであろうことをお断りしておく。

西鶴の『好色一代男』では、文語に少し口語（俗文）がまじるという程度であったが、近松の浄瑠璃では、少なくとも会話（台詞）部分では、話し言葉そのものとはまではいかなくとも、おおむね口語文といえる様相を呈している。これは、時代による違いより、それぞれのジャンルによって生じた違いが大きいであろう。長いセリフがきわめて多い作品、たとえば『生玉心中』などでは、ト書きや地の文に相当する部分、つまり文語部分が少なく、総合的な印象としては、すでに言文一致体が成立しているのではないかと思えるほどである。言文一致と言っても、その「言」は、むしろ関西語である。

以下、作品資料および現代語訳としては小学館の新編日本古典文学全集『近松門左衛門集』①②を使った。

大阪方言の特徴の一つとして、敬語とは逆に、聞き手や話題になっている対象を引き下げる言葉があげられる。たとえば『丹波与作待夜のこむろぶし』では、与作（馬子）が主要人物となっていて、彼はつぎのような言葉を使っている。

傍輩^{はうばい}どもとかけどくに、道中双六打^{くつ}って眷^{ぜい}の錢ほどしてこませうと思ふたに。人を呼び回つてなんでやる。はれ、やれやれやれ、きりきり乗らつしやれ。馬遣ろいとぞ、つかうどなる。344ページ
どうずりめ、覚えてけつかれ。問屋^{とひや}、368ページ
あいた、あいたしこ。横腹^{よこばら}を踏^ふみくさる。何者じや
370ページ

「(～して) こます」「(～して) けつかる」「(～し) くさる」と相手を罵倒するための三つの強烈な補助動詞がすでにそろっている。

気味悪さうに。見世の手水鉢^{てうづばち}で頬を洗うてけつかつたと。語れど、『生玉心中』348ページ

のように、他にまったく用例がないわけではないが、『丹波与作待夜のこむろぶし』では、与作の「馬子」という職業・身分にふさわしいものとして、このような乱暴なことは使いをさせているのであろう。

現在、播磨方言などに残る「てや」敬語の元になった「～てぢや」の例がわずかながら見られた。これが江戸前期の歌舞伎資料などから見られ始めることなどについては、すでにいくつかの論考に¹²⁾ある。

こりや、さがは何してぢや、色がなうて飲めぬわい
『生玉心中』344ページ

親父さまはいとしや、早う抜^ぬかしてくれよとて。狂乱^ぬになつてぢや。『冥途の飛脚』152ページ

次は、「～て」に「ぢやげな」の付いたもの。

そなたも姉の知つてぢやげな『生玉心中』343ページ

そなたもおれに惚^ぬれてぢやげなと言へば。『曾根崎心中』33ページ

現代播磨方言などでは「～てか」もテヤ敬語（テ敬語）に含まれる。

あれ親仁^{おやじ}聞いてか『五十年忌歌念仏』20ページ

待つてか『心中天の網島』423ページ

それ覚えてか『生玉心中』374ページ

今のを聞いてか。聞きやつたか『生玉心中』379ページ

「～やす」は、特定の作品の特定の登場人物に限って見られるようである。

どうでござりやす『心中天の網島』386ページ(女郎)
 文の便りも叶はぬやうになりやした『心中天の網島』386ページ(湯女)
 打ち消しの過去,「～なんだ」は,少数ながらけっこう多くの作品に見られる¹³⁾。
 詮議しても知れなんだ。『五十年忌歌念仏』39ページ
 思はなんだは身が不覚『丹波与作待夜のこむろぶし』365ページ
 なぜ見届けて来なんだ『心中天の網島』391ページ
 「～いで」が「～なくて」の意で使われているが,これも古い関西方言には残っていた。
 手間遣らいででも大事なし『五十年忌歌念仏』22ページ
 「～やる」(「お～やる」),「～をる」は,西鶴の『好色一代男』と同様の使われ方をしている,用例は多い。また,敬意ではニュートラルな「～てゐる」も使われており,これらは現代大阪弁の「～よる」「～ている」「～はる」の使われ方を想起させるものである。山本俊治「大阪府方言」¹⁴⁾では,ヨルは罵詈雑言に含まれ,「トール・テヨルは,見下げたぞんざいな言い方になり,テルは対等以下への言い方,テヤルは上品な言い方となる」(62ページ)とある。このテルはテイルの縮約,もしくはイが脱落したもの。
 さても大きうなりやつたの『丹波与作待夜のこむろぶし』351ページ
 山川で怪我しやんな『丹波与作待夜のこむろぶし』354ページ
 オオ勘太郎戻りやつたか『心中天の網島』403ページ
 母御前はお死にやつて『冥途の飛脚』112ページ
 それほど江戸へ行きたくば,乳母ばかり行きをれと。お乳の人の背をとんとんと打たしやんして。御機嫌が損ねました。『丹波与作待夜のこむろぶし』341ページ
 まだ言ひをるか,聞き分けない『丹波与作待夜のこむろぶし』353ページ
 エエいかに身が術ないとて,不器用な気になりをつた『生玉心中』349ページ
 みなあいつが心から,身も狭い苦をしをる『冥途の飛脚』150ページ
 娘が大事。茶屋者請け出し,女房は茶屋へ売りをらう(現代語訳では「女房は茶屋へ売りやがろう」とある)『心中天の網島』406ページ

与作殿か。そちはここに何してゐる『丹波与作待夜のこむろぶし』370ページ
 身一つ捨てると思うたら,みな胸に籠めてゐる『冥途の飛脚』133ページ
 そちが飲むは知つてゐる『生玉心中』367ページ
 敬語補助動詞でハル敬語の元になった「～なさる」やいわゆる遊ばせ言葉の「～あそばす」も少ないながら見られる。(「あそばす」は西鶴の『好色一代男』にも見られた)
 御休みなされませと『丹波与作待夜のこむろぶし』361ページ
 これしきのこと評議に及ばず,お助けなさる。『丹波与作待夜のこむろぶし』379ページ
 それまで辛抱あそばせと『五十年忌歌念仏』36ページ
 終助詞「～わ」は,少ないが現代関西方言どうよう,男性も使っている(女性は「～わいの」などの形を取るようである)。
 ヤア源十郎が切られたわ『五十年忌歌念仏』41ページ(現代語訳では「切られたぞ」)
 『好色一代男』の次の「～は」も,これと同じものである。
 京より結構なるいせ参りがあるは141ページ(現代語訳では「あるぞ」)
 古代語と近代語との動詞の大きな相違点として,近代語では強変化活用(四段・五段活用)動詞の連用形の音便化が進んだ結果,口語動詞のいわゆるテ型(～て)が,文語動詞連用形と同じような比重,ないしはまともまりを持つようになり,「～ておく」「～てしまう」など,補助動詞を,助動詞ないし活用接尾語と同様のものとして後に付けた形が頻繁に使用されるようになったことがあげられよう。近松の作品にもその例は見られる。
 小まんを内へ入れておきや。『丹波与作待夜のこむろぶし』372ページ
 顔を向けてくだされ『五十年忌歌念仏』48ページ
 鳥屋の客にさりつと請けさせてしまひたい『冥途の飛脚』130ページ
 鼻緒もすげてあげませう『冥途の飛脚』147ページ
 ただし,多種の近世語の使用があり,中世の助詞「ばし」の使用や,古代からの助動詞「つ」の活用,「き」の連体形「し」,「たり」の連用形「たる」の使用なども少ないながら見られるというように,古代・中世的な要素も残っていて,一見,古代語・中世語・近世語・近代語のごったまぜのような印象を受けかねないが,

詳しく見ていけば、作品により登場人物により微妙に注意深く使い分けられていることが知られるであろう。

こなたはどれでばしござるぞ『冥途の飛脚』145ページ

蒔絵道具も出来つらん『五十年忌歌念仏』26ページ
 胴欲者には誰がなせしと『五十年忌歌念仏』32ページ

好き好んだることでもなし。『五十年忌歌念仏』27ページ

以上、打ち消しの「ぬ（→現在は、ん）」の使用、動詞・形容詞におけるウ音便の使用、などは、関西方言と文語に共通するものとして言われてきたし、断定の「ぢや（→現在は、や）」の使用なども、いまさら言うまでもないことであるが、その外にも、西鶴・近松の作品中の会話文に現代関西方言に通じるものは多い。西鶴・近松の作品の言語についての研究は多く、いまさら大きく付け加えることはなかったかもしれないが、それら文学資料における「関西語」を、現代関西方言の祖形としてとらえる、その豊かさや魅力をみるという視点から、いささかの自分なりの考察を試みたつもりである。

注

- 1) 堀井令以知『京都語を学ぶ人のために』（2006年9月）に「京都語は「京ことば」ともいう。京都人にとっては、「京都方言」と方言の名称で呼ばれるのは好ましくない。京都語は方言ではないという意識が強いからである」云々とある。（3ページ）
- 2) 坂梨隆三「近代の文法Ⅱ（上方篇）」（『講座国語史 第4巻 文法史』1982年12月）
- 3) 山崎久之『統国語待遇表現体系の研究』1990年2月、参照
- 4) 榎垣実「西鶴と大阪弁」（『国文学』1967年4月）に、西鶴の作品には「多少軽しめた時に男達が〔京阪共通〕使う「やる」という助動詞の原形「をる」も盛んに出て来る」とある。（46ページ）
- 5) 役割語については金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』2003年、参照
- 6) 中井精一「奈良県方言の特色」（日本のことばシリーズ29 『奈良県のことば』2003年6月所収）
- 7) 山崎久之『統国語待遇表現体系の研究』1990年2月、参照
- 8) 注4の論文に「現在大阪の婦人達が盛んに使う敬意とういよりは親愛の「やる」も、西鶴の作品に出てくる。（近松にも多い。）」とある。（46ページ）
- 9) 榎垣実「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』1962年3月所収、では「ヨルは中近畿で広く使うのに、ヤルは大阪市とその周辺だけで、主として若い夫人が使う」（44ページ）とあり、山本俊治「大阪府方言」

『近畿方言の総合的研究』1962年3月所収では「女子ことばにあって、ヤハル・ハルより待遇度が下がると、ヤル・ヤを用いる。（中略）これは「～ある→ヤル→ヤ」と推移したものであろう。待遇度はあまり高くないが（したがって、主として第三者の言動に対して用い、相手に対しては、ヤハル・ハルが殆どである）、しかし、やわらかな感じのする言い方である。（46ページ）とある。

- 10) 中村幸彦「近代文学にみる発想法の展開」（『日本語の歴史5』（近代語の流れ）平凡社ライブラリー2007年7月第四章）315ページ
- 11) 服部幸雄氏「浄瑠璃・歌舞伎の敬語」敬語講座4『近世の敬語』1973年11月所収
- 12) 奥村三雄「敬語表現の一形式」（『近畿方言』第十号）、湯澤幸吉『徳川時代言語の研究』山崎久之『国語表現体系の研究』などの研究があるとされる。（金沢裕之『近代大阪語変遷の研究』1998年5月参照）
- 13) 坂梨隆三「近代の文法Ⅱ（上方篇）」（『講座国語史 第4巻 文法史』1982年12月）504ページに「このナンダは室町時代によく用いられており」とある。
- 14) 山本俊治「大阪府方言」（『近畿方言の総合的研究』1962年3月所収）

資料文献（第一章）

新編日本文学全集『井原西鶴集』①（校注・訳者）暉峻康隆 東明雅1996年小学館『近松門左衛門集』①②（校注・訳者）鳥越文蔵 山根為雄 長友千代治 大橋正叔 阪口弘之1997年、1998年小学館

（以上、小谷博泰）

第二章 関東出身の作家が作品内で使用する大阪方言

——谷崎潤一郎と里見弴を例に——

2008年3月28日に公示された小学校学習指導要領・中学校学習指導要領は、それぞれ2011年と2012年から実地される。方言については、現行では小学校・中学校ともに「言語事項」として含められていたものが、改訂後は小学校では第5学年及び第6学年の「話すこと・聞くこと」へ、中学校では「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」へ含まれることとなった。しかしながら、小学校では「共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと」という目標は変わっておらず、方言そのものの学習は中学校へ委ねられている。一方、中学校では現行のものは「共通語と方言の果たす役割などについて理解するとともに、敬語についての理解を深め生活の中で適切に使えるようにすること」となっていたものが、改訂後は「話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果

たす役割、敬語の働きなどについて理解すること」としたのち、次の部分に加えられている。

共通語を適切に使うことは、人々が相互の理解を進めるために不可欠な能力である。一方、方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的・社会的な伝統に裏付けられた言語である。その表現の豊かさと魅力など、方言が担っている役割を十分理解させ、方言を尊重する気持ちをもたせるようにしながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて使い分けられるように指導することが大切である。

このことから、これからの教材研究においては、方言を言語事項としてのみ捉えるのではなく、方言が使用されている文学作品も対象とする必要があるといえよう。

文学作品では、会話文に方言の使用される例が最も多く、地の文まで方言で書かれたものは一人称小説以外にはほとんど存在しない。また、方言が使用される作品と、方言が使用されない作品では、方言が使用されない作品の方が多い。では、方言が使用されない場合の方が一般的であるにもかかわらず、文学作品の中に方言が使用されるのはなぜであろうか。平林文雄(1958)では、「文章を書き現す場合は、より多くのより広い範囲の人々の目に触れるという意識が働くため、なるべくこれらの人々にも分るようという配慮から、できるだけ共通語(標準語)的な表現を心掛ける」とし、方言が使用されるには次のような目的があると述べる。

方言で書かれた文芸作品の対象とするところは、その地方人であり、またその目的とする所も舞台を限定して、その地方の生態・人情を感情のひだに至るまで、細かに当該方言を用いて隈なく表現することであり、そこにまた文芸作品に方言を用いる意義もあるのであり、方言でなければ真にその地方独特のムード・ニュアンスは表現し得ないのである。

そして、方言は「言語形成期を過ぎた土地のことば(方言)以外は受身に理解することはできても能動的に自らこれを操ることはできない」ため、上記のような目的を方言話者でなければ達することはできないとする。このような考え方は平林(1958)だけではない。そのため、方言話者ではない作家が文学作品内に方言を使用した場合、その研究は方言が正しいか否かのみ注目されることが少なくない。しかし、方言話者ではない作家が使用する一見誤用に見える方言にも、詳

細に分析することによって独自の表現が見えてくるものがある。例えば、谷崎潤一郎は関東出身でありながら、阪神間を舞台とした多くの作品で方言を使用しており、その使用を見ると谷崎の表現意図が窺える。つまり、方言話者ではない作家が使用する方言を子細に見ることも、方言の表現の豊かさと魅力など、方言が担っている役割を十分理解するうえで必要であり、むしろ、方言話者ではないからこそ方言を客観的に捉え、作品に生かすことができる場合もあるのである。そこで、第二章では関東出身の作家が作品内で使用する方言に注目し、まずどのような方言形が作品内に選択されやすいのか、または選択されにくいのかを示し、方言が選択される場合、どのような表現効果を期待しているであろうかを考察したいと思う。

1. 調査対象作家

調査対象には谷崎潤一郎と里見弴の2人を採用した。谷崎潤一郎は1886年東京市生まれ、里見は1888年横浜市生まれであり、ともに言語形成期を関東で暮らし大人になってから関西に移住している。谷崎が関西に移住するようになったきっかけは、1923年に起こった関東大震災であり、その後1950年に熱海に別荘を購入するまで阪神間を中心とした関西を離れなかった。一方、里見は1913年の年末に家出という形で大阪南区の屋形¹⁾に寄寓し、1915年の12月には上京しているため、関西在住期間は約2年間と短い。2人の大きな共通点は、大阪出身の妻を娶ったことであろう。谷崎は2度の結婚を経験し3度目の結婚で根津松子を娶りその後をともに過ごしており、里見は寄寓していた屋形の娘・山中まさを娶り生涯をともにした。谷崎と里見が大阪方言の小説を書いたのは、これら妻との出会いの後であり、この出会いが作品に大きく影響していると考えられる。

2. 調査対象作品

谷崎の作品は「卍(まんじ)」²⁾、里見の作品は「母と子」「父親」を調査した。初出など作品の情報をまとめたものが表1である。「卍(まんじ)」は、初出の第1回目と第2回目が標準語³⁾で書かれており、第3回目から徐々に大阪方言が加えられている³⁾。その後、単行本にする段階ですべてを大阪方言に統一させ⁴⁾、谷崎にとってこれが大阪方言を一貫して使用した初めての作品となる。里見は「母と子」の前に「河豚」(1913年初出)で、「母と子」と「父親」の間に「夏絵」(1915年初出)「善心悪心」(1916年初出)「妻を買ふ経

表1 調査対象作品情報

		卍 (まんじ)	母と子	父親
初出		1928-1929年 『改造』(改造社)	1914年 『東京朝日新聞』	1920年 『人間』(東京人間社)
主要人物	女性	柿内園子 徳光光子	母親 おさだ	きん助 おてる
	男性	柿内孝太郎 綿貫栄次郎	木村 久保	木田
時代		1928-1929年	明記なし	明記なし
場所		天王寺・西宮・芦屋	天王寺・江戸堀・堺	堂島・島の内

験」(1917年初出)「今年竹」(1919年初出)で関西方言を使用している⁵⁾が、この中で使用された方言が大阪方言と限定できるものは、「河豚」「母と子」「夏絵」「妻を買ふ経験」「父親」であり、さらに中心人物が大阪方言を使用しているものは「河豚」「母と子」「父親」であった。この中で、「河豚」は発話文が少なく、中心人物の心の声には方言が使用されていないため、今回は「母と子」「父親」を採用した。

本稿では方言話者ではない作家が、方言を作品内で使用する際、どのような方言形が選択されやすいのかを示すために、谷崎の「卍 (まんじ)」では方言が徐々に織り込まれた〈その三〉〈その四〉を調べた。また、「卍 (まんじ)」は柿内園子が先生に語る形で書かれているため、里見の「母と子」「父親」では女性の中心人物の中で女性の発話文を調べた。

3. 共通している方言形

大阪方言の特色について、郡史郎(1997)には音声・アクセント・イントネーション・文法・その他の特色があげられている。音声・アクセント・イントネーションは話し言葉に見られる特色であり、書き言葉である小説には現れにくい特色であろう。今回調べた3作品においても音声・アクセント・イントネーションの特色は見られなかった。谷崎と里見に共通して使用されている方言形は、次のものであった。具体例もいくつかあげておく。

● ウ音便

冗談にさう云うてゐました(その三69下⑬)
もう空が大分暗うなつた時分(その三70下⑩)
そない云うたかてうちもうペコペコやわ
(その四35上⑬)
此の頃になつてこんなにおそうなつたことはありませなんだ(その四36上⑫)
いつも待て待て云ふたかていな(母と子11月27日)
あんな白うなつたやうなもんを抱いて来てからに

(母と子11月30日)

そやなア、見たとこで云ふたら、まア十両までゆかんうちに(父親17⑩)

なんや知らん、今夜だるうてしょうがない

(父親23②)

● 否定表現

あんたにお礼云はんならんことがあるねんけど
(その三70下⑭)

大抵縁談もあかんやうになるやろと思てんねん
(その四34上⑨)

そんな事ならかめへんけども(その四34上③)

いつぞ遊びに来えへんもんやろか云うてはつた
(その四35下②)

やつぱり生まんならん(母と子11月29日)

ちよつとも眠たいことあれへん(母と子11月29日)

逆上えへんか?(母と子11月29日)

まア十両までゆかんうちに老毫れてしもうた

(父親17⑩)

そんなこと云ふてたらあけへんで(父親22⑥)

● アスペクト表現

あんたきのふ道頓堀を歩いてたなあ
(その三70上①)

光子さんに云うてなかつたので(その四35下⑥)

何してはんねやろ(母と子11月24日)

遊んでるにも遊んでへんにも(父親19④)

● ハル敬語

そしたらどないに云やはるか知らん

(その三70上⑨)

何処で聞きはりましたん?(その四33下④)

そしたらどない云やはつた?(その四35上⑩)

そんなけつたいな学校なら止めてしまひなはれ

(その四34上⑰)

お婆さんもう来てくれはりそなもんやにな

(母と子11月24日)

あん時だけは先生もほんまに怒りやはつてん

- (その四33下⑧)
 こんな辛いこと知らんわ (母と子11月28日)
 まあま、永いことだんなア、あんたはん……………
 (父親2⑧)
- 「よい」を表すエエ
 嫁入りなんかせいでもええやうになりさうやねん
 わ (その三70下⑩)
 あんたはそんでええやろけど (その四34上⑩)
 さアもうええ、かげんにねたらどうや
 (母と子11月29日)
 えらい、ええ、身分だんねなア (父親11⑥)
- 多い少ないを表す語
 土筆やら、たあんと採りました (その三70下⑤)
 どんなことを云はれようとちつとも構ひませんけれど (その三68下⑤)
 —さう云うたらお母さんちよつとまごつきはつてなあ (その四33上⑥)
ちよつとも眠たいことあれへん (母と子11月29日)
たんと儲かるやうにしなはつたらよろしやおまへんかいな (父親19⑩)
ちよつともおそいことあれしめへんで (父親11⑬)
- 「大変だ」を表すエラ・エライ
 それが知れたらえらい評判になりますわ
 (その三69上⑪)
 その日は割りにえらい人出でしたから
 (その四34下⑪)
えらいことになつたな (母と子11月25日)
えら悪おましたな (父親5⑯)
- 「何」系
何と云ふ人かて、そりや綺麗な人やもの
 (その三69下⑤)
何だか息が詰まるやうに感じたのです
 (その四34下⑱)
 へつてたら今のうちに何んぞたべときや
 (母と子11月24日)
なんぞおごりまんがな (父親3⑪)
- 「妙だ」を表すケツタイ
 こなひだからけつたいな噂が立つてなあ
 (その三69下⑨)
 そやけど何がけつたいでんねん? (その四33下⑤)
 あんた、怪態な顔するねんな (父親13⑯)
- 「このように」「そのように」「あのように」「どのように」を表す語
 そしたらどないに云やはるか知らん
 (その三70上⑨)
- それほとんどでつかとそない云ひますねん
 (その四33下③)
 そしたらどない云やはつた? (その四35上⑱)
こないいつぱいお酒入れるもんやあれへんで
 (父親16⑨)
 嘘にでもそない云ふとくんなはつたら嬉しおまんがな (父親3⑩)
 一体、どないしてん、あんた、えらい耄けなはつたんやなア (父親13⑩)
- 応答を表すへ・へエ
へえ、そらそんな噂あることはありまつけども
 (その四33下④)
へ、ご苦労さん、よろしゅお頼ん申しまつせ
 (母と子12月2日)
へ、でけましたで (父親17⑨)
- 「ところ」を表すトコ
 土筆のたんと生えてるとこをよう知つてるわ
 (その三70下④)
 ……わてとこ、ついこの薬師さんの路次にゐまんね (父親3⑫)
- 「本当」を表すホンマ
 それよかそらほんまの事てつか? (その四33下⑤)
 そらおさアちゃん、ほんまもんやで
 (母と子11月25日)
ほんまに分らしめへんで (父親2⑫)
- 「もの」を表すモン
 ほんとに噂云ふものは早いもんで (その三70下⑱)
 いつぞ遊びにえへんもんやろか云うてはつた
 (その四35下②)
 そらおさアちゃん、ほんまもんやで
 (母と子11月25日)
 お酒みたいなもん、うちにあらへん (父親13④)
- 「それは」を表すソラ
そらそんな噂あることはありますけども
 (その四33下③)
そらおさアちゃん、ほんまもんやで
 (母と子11月25日)
そらさうと、さいぜんの話、どないだしたんやなア (父親16⑯)
- 自称詞・対称詞
 —あんた、あのう、船場の徳光云ふ羅紗問屋あること知らん? (その三69下⑥)
うちの顔が好きや云やはつてモデルにしやはりましてん (その四33下⑩)
あんたはそんでええやろけど (その四34上⑨)

うちかて^た食^たべずにはゐられへんし

(母と子11月27日)

木田はん、あんたまア、ころッと変んなはつたなア (父親2①)

● 「～さん」を表すハン

市議員^{しくわいぎあん}のいとはんもよろこんではるやろなあ

(その四34下③)

あんたはん、まア………… (父親2⑤)

上記に示した方言形は、文法・語彙の特色である。音声・アクセント・イントネーションの特色が見られないのは、小説が書き言葉であるためのみではない。例えば、郡(1997)には「連母音の音声変化」として「英語」「丁寧」が「エーゴ」「テーネー」となる例があげられているが、この特色は上記のように文字で書き表すことができる。にもかかわらず、それが小説で書き表されていないのは、音声・アクセント・イントネーションの特色よりも文法・語彙の特色の方が選ばれやすい方言形であることを示している。

4. 共通していない方言形

谷崎の「卍(まんじ)」にのみ見られる方言形は次のものであった。

● ナンダ

お金を貸^かしてもらへなんだら悪口^{わるぐち}を云ふ

(その四34上⑮)

どんな表情^{へいしやう}をしてゐなさるのか分りませなんだ

(その四35上⑦)

こんなにおそなんなつたことはありませなんだ

(その四36上⑫)

● オス

そんな噂^{うわさ}が立つ筈^{はず}がおへんやないか

(その四33下⑨)

何^{なん}とかはん云^いふ人とばつかり仲良^{なかよ}うせん方^{ほう}がよろしおつやないか (その四34上④)

しようむない事^{こと}をあんまり云^いはれん方^{ほう}がよろしおつせと云^いうて (その四34上⑥)

ナンダは近世には上方語として江戸語へ影響を及ぼしていたこともあり⁶⁾、「卍(まんじ)」では標準語で書かれていた〈その一〉や〈その二〉に次のような例がある。

どう云^いふ訳^{わけ}で赤^{あか}くなつたのかその時^{とき}はまだ自分^{じぶん}で自分^{じぶん}に分りませなんだ (その一79上⑱)

何^{なん}だか気^きがさして、先^{せん}のやうにお顔^{かほ}をしげしげと見守^{みまも}ることが出来ませなんだ (その二109下③)

また、オスは語り手である園子が、光子の会話を直接

引用する場面が出てくるが、その光子はというと自分の母親の発話を直接引用しており、その光子の母親の発話部分でオスが使用されている。これは、大阪方言の中でも古い船場言葉⁷⁾を意識し、使用していると思われる。古い船場言葉であるため、船場出身であっても若い光子には使用例がないが、光子の母親にはその使用が見られるのであろう。また、船場言葉は、特有のことば遣いであり、「長堀川をへだてて南の島之内言葉とは著しい相違を示していたといわれる」(榎垣実(1955)ため、里見の作品にはオスの例が見られないと考えられる。

里見の「母と子」「父親」にのみ見られる方言形は次のものであった。

● 方向・場所を表すイ

どこぞい行きまへうな (父親11⑩)

どこぞい連れていとおくなはれな (父親11⑪)

一遍こつちやい来て座んなはれ (父親12⑪)

瓶^{びん}ぐちこ、いもつといで (父親16⑫)

わてらみたいな貧乏^{つまるん}ものとこい来て (父親20①)

序にもう一遍くべいよつて (父親27⑩)

よそのうちい来て (父親29⑪)

● 引用の助詞「と」の省略(「と」の入る場所には「 ϕ 」を示す)

生めへんと云^いたかて、またでけりやしよがないが (母と子11月29日)

お絹^{きぬ}どんといふたら、色^{いろ}が白^{しろ}いとかよう寝^ねてはるとかと云^いふて (母と子11月30日)

こつちやへはいんなはれと云^いふたら……………」

(父親10⑮)

うだうだと云^いはんとはいんなはれ (父親11①)

うちにあらへんと云^いふたら、分らん人やなア

(父親13④)

この助詞イや助詞「と」の省略は、谷崎よりも里見の方が早くに注目していたようであるが、里見自身も「母と子」では助詞イや助詞「と」の省略を頻繁に行っているわけではないため、どちらかといえば方言形になりにくいものといえよう。また、谷崎は「卍(まんじ)」を単行本にするにあたっては、助詞を書き換えている。

今度内^{こんどうち}へ遊^{あそ}びにお越^こしになりませんか

(初出その三68下⑫)

↓

今度内^{こんどうち}い遊^{あそ}びにき来なされませんか

(初版その三16(24))

「(略)これでやうやう胸^{むね}すとしました」とお云

ひになつて（初出その三六八下⑧）

↓

「(略) こいでやうやう胸すッとしました」い云はれて（初版その三六八⑧）

「卍（まんじ）」の初出において、助詞イや助詞「と」の省略が使用されていないのは、これらを谷崎は音韻の特徴と捉えているからとも考えられる。一方、里見はこれを文法の特徴と捉えていたのではないだろうか。ここに、方言の捉え方の差異が見られる。

5. 方言形になりにくいもの

谷崎と里見に共通して方言形になっていないものは次のものがある。

● 一音節名詞の二拍化

お嫁入り前の身まへで（その三六八下⑤）

そんな気きがしまして（その三六八下⑪）

おてやんの身みの都合ごごでなア……（父親3⑤）

なんぞ仔この煮にいたもん（父親21⑥）

あんた食逃たべにげして行きなはる気きか（父親29⑨）

これらは、音声の特色であり、そのため選択されにくいと考えられる。

6. 方言を使用した表現

最後に、これらの方言形を使用して、谷崎や里見がどのような表現を行っているかを考察したい。そのためには共通している方言形の中から、谷崎と里見に使用差が見られる方言形に注目する必要がある。なぜ使用差が生まれるのかを考えることによって、方言における表現を見ることができると考えるのである。

まず、使用差があったのはハル敬語である。谷崎と里見に共通したハル敬語には、ハル型・ヤハル型・ナハル型が見られたが、「父親」では圧倒的にナハル型が多い。また、「です」「ます」系では「母と子」「父親」に促音便化した例が多い。これは、位相差によるものと考えられる。つまり、谷崎と里見の作品で登場人物の身分に差があるため、使用差が現れたのであろう。「卍（まんじ）」の園子や光子は、趣味で美術学校へ通うような中流階級の女性であり、もちろん自分たちは働かず、夫または両親に養われている者たちである。さらに、養われているだけではなく、自分たちが温泉や遠出をする費用も不足なくもらうことができ、生活する上で金銭的に窮する場面は一度として描かれない。一方、「母と子」「父親」の女性は元芸妓または現役の芸妓であり、養ってくれるような男性はいない。むしろ、「母と子」のおさだは妊娠するも、その相手

である男性からお金をもらうことはできず、「父親」のきん助も昔の馴染であった木田から、飲食代を踏み倒される。

このような位相差は同一作家においても見られる。例えば、谷崎の作品「猫と庄造と二人のをんな」（1936年初出）では、ナハル型が最も多く使用されている。この作品の舞台である芦屋は、大阪方言よりも神戸方言が使用される地域であり⁸⁾、鎌田良二（1979）によれば、神戸でナハル型は命令の形で使用されたことがあげられている。よって、「猫と庄造と二人のをんな」で使用されている例は現実と比べれば誤用となるが、他の谷崎の作品と比較すると端的に間違いとは言いつれない。方言が使用されている谷崎のその他の作品を確認する⁹⁾と、「蓼喰ふ虫」（1928年初出）ではオ～ヤスガ、「春琴抄」（1933年初出）ではオノゴ～ナサルが、「夏菊」（1934年初出、未完）「細雪」（1943年—1948年初出）ではハル型が最も多く使用されており、作品によって使用に差がある。そして、ナハル型は「猫と庄造と二人のをんな」でのみ最も多く使用されており、これらの中で唯一、「猫と庄造と二人のをんな」の舞台が浜の手、つまり下町となるため、尊敬語に位相差を持たせていることが分かる。

次に、谷崎と里見に使用差が見られた方言形は、自称詞であった。まず、先と同じように自称詞にも位相差が見られる。「父親」では、きん助がワシとワテという自称詞を使用し、「卍（まんじ）」ではお梅という光子の女中がワテを使用する。そして、ワテは園子や光子は一度も使用しない。さらに、「卍（まんじ）」では園子と光子が、物語が進むにつれてアテという自称詞を使用するようになる。このアテは、二人の同性愛という恋愛関係が深くなってから使用されており、「卍（まんじ）」の軸となる同性愛の関係を自称詞によって表現した例となる。このように自称詞によって人間関係の変化を表した例は、「母と子」「父親」には見られないが、「今年竹」（1919年初出）には喧嘩の場面で、おうたという人物が5種類の自称詞を使用している例がある¹⁰⁾。おうたはもともと関西に住んでいた人物であるが、愛人に連れられて上京し、日本橋で料理屋を出すようになり標準語で会話をするようになった。しかし、喧嘩のように興奮すると関西の訛が出てしまうことが地の文に書かれてあり、発話人物の心理的变化を里見は自称詞で表現したといえる。このように、自称詞で様々な表現が可能なのは、方言の表現の豊かさであろう。例えば、大阪方言では女性の自称詞にワタクシ・ワタシ・ワタイ・アタシ・ワテイ・ワテ・ア

テというバリエーションがある。この中で、共通語でも使用されるものはワタクシ・ワタシ・アタシのみであり、もし共通語のみで登場人物の心理を表現しようとするならば、ワタクシ・ワタシ・アタシの3種類しか使用できず、おうたのように一人の人物が5種類もの自称詞を使用することは不可能である。そして、このような共通語では表すことのできない表現は大阪方言のみにあるのではなく、各地方の方言にある特色であり、方言話者ではない作家があえて方言を使用する理由もここにありと考えられる。

(第二章は、安井が第89回日本方言研究会(2009年10月30日 於島根大学)にて口頭発表したものをもとに、まとめたものである。)

※ 本稿で作品を引用するにあたっては以下を底本とした。

「卍(まんじ)」その三『改造(3)』1928年
 「卍(まんじ)」その四『改造(4)』1928年
 「母と子」『東京朝日新聞』1914年11月23日-12月3日
 「父親」『人間2(6)』1920年
 旧かな・ルビ・傍点は原文のままとし、旧字・異体字は新字体に改めた。くり返しを表す「く」「ぐ」は、くり返されることばを書き起こした。「卍(まんじ)」「父親」の引用の後には、頁数(半角数字)・行数(丸囲み)を示し、「母と子」の引用の後には新聞の月日を示した。

注

- 1) 「花柳界で、芸妓の住居のことをいう」(牧村史陽(1979))。
- 2) 学校指導要領に従えば「共通語」といわれるが、「共通語」という概念は戦後に確立したもので、谷崎や里見が作品を発表した当時は「標準語」と呼ばれていたためにここでは「標準語」とする。
- 3) 大阪方言の加えられてゆく様子は、河野多恵子(1976)に詳しい。

- 4) その校異については、拙著(印刷中)に詳しく示してある。
- 5) 里見の作品に見られる関西方言については、拙稿(2009)に詳しい。
- 6) 佐藤武義(1995)には、江戸語へ影響を及ぼしたものとして、打消の助動詞「ん」・形容詞連用形のウ音便などをあげる。
- 7) 船場とは大阪の中央区に位置する「東は東横掘の西岸、南は長堀の北岸、西は西横掘の東岸、北は大川及び土佐堀川に沿える一区劃」(宮本又次(1960))のことである。
- 8) 和田実(1956)には、京都・大阪・神戸・芦屋の方言の相違があげられている。
- 9) 拙書(印刷中)による。
- 10) 安井(2009)による。

第二章 引用文献

- 榎垣実(1955)『船場言葉』近畿方言学会
 鎌田良二(1979)『兵庫県方言文法の研究』桜楓社
 河野多恵子(1976)「「卍(まんじ)」について」『谷崎文学と肯定の欲望』文藝春秋(初出1975-1976年)
 郡史郎(1997)「総論」『大阪府のことば』明治書院
 佐藤武義遍(1995)『概説 日本語の歴史』朝倉書店
 平林文雄(1958)「文芸作品における方言について——深沢七郎の作品の場合——」『東海大学紀要 文学部1』東海大学
 牧村史陽編(1979)『大阪ことば事典』講談社
 宮本又次(1969)『船場』ミネルヴァ書房
 文部科学省(1998)「小学校学習指導要領」
 URL http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b.htm 最終閲覧日 2010年1月10日
 ————(1998)「中学校学習指導要領」
 URL http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301c.htm 最終閲覧日 2010年1月10日
 ————(2008)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
 ————(2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
 安井寿枝(2009)「里見淳の小説に見られる関西方言」『語彙研究7』語彙研究会
 ————(印刷中)『谷崎潤一郎の表現』和泉書院
 和田実(1956)「谷崎潤一郎の作品の関西弁」『言語生活六一』筑摩書房

(以上、安井寿枝)